

氏名(本籍)	新町貢司(宮城県)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博甲第2478号		
学位授与年月日	平成13年3月23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	文芸・言語研究科		
学位論文題目	神話学の変遷と非合理の発見		
主査	筑波大学教授		井上修一
副査	筑波大学教授	博士(文学)	荒木正純
副査	筑波大学教授		上田浩二
副査	筑波大学教授	D.L.(文学)	川那部保明
副査	筑波大学教授		森田孟

論文の内容の要旨

本論文は、近代ヨーロッパの神話学における研究対象や解釈方法の史的変遷を克明に跡付け、変遷のよって来る理由を考察し、非ヨーロッパ諸国の非合理神話がヨーロッパ文学に与えた影響の大きさをドイツ文学を例に証明したものである。構成は以下の通りである。

序論

第一章 近代ヨーロッパの神話学

第二章 ロマン主義の神話学

第三章 進歩史観と二元論に基づく神話解釈

第四章 二元的世界観の否定 — ニーチェの〈ツアラトゥストラ〉

第五章 母権制とオリエント・アジア的なものの表象 — ホーフマンスタールとヘッセの場合

結論 非合理の発見とヨーロッパ精神の動揺

註

引用文献・参考文献一覧表

序論では、神話学は18世紀末に始まった学問領域であるが、今日もなお一つの学問として確固たる位置を獲得するに至っていないことを論じている。時代の変遷につれて神話に対する考え方が大きく変化したため、研究対象や解釈方法が確立されるに至らず、さまざまな方向性を持つ多くの神話研究が並立したと分析している。

第一章では、神話学に内在する時代性について述べている。西洋の近代神話学は西洋中心主義的発想のもとに生まれたが、植民地主義・帝国主義時代を経て世界が広まると、非ヨーロッパの神話にも関心を広げた。ことに、インド支配や南太平洋地域への進出で先んじたイギリスでは、20世紀前半までの神話学を基礎づけるような重要な研究が生まれているという。

第二章では、フランス啓蒙主義の合理主義的神話学を批判したドイツ・ロマン主義の神話学を採り上げている。啓蒙主義時代の合理主義的神話観は、19世紀後半以降の進歩史観に基づくヨーロッパ文化中心主義的神話理解へ

繋がる。しかし、それを批判して神話のうちに人間存在の根源を認めたドイツ・ロマン主義の神話観にも、限られた資料とキリスト教中心の思考という点では、非ヨーロッパ的神話に対する先入見が見られるという。

第三章では、エルンスト・カッシーラーの神話研究を採り上げる。カッシーラーは比較神話学や人類学の成果を取り入れつつ、精神と物質の二元論と進歩史観による神話分析を行っている。また、西洋近代を歴史の頂点におくヘーゲルの歴史哲学からも大きな影響を受けている。古代の神話的世界観から近代的認識までを、人間精神の成長・認識能力の成熟の過程と捉えるカッシーラーの神話論を、著者は20世紀前半までの西洋の神話観を総括するものと考えている。

第四章では、フリードリヒ・ニーチェの『ツァラトゥストラ』を扱っている。『ツァラトゥストラ』は象徴的・比喩的表現に満ちた作品だが、そうした表現の多くは神話に由来する。そのニーチェが神話を知る知識源となったのはロマン主義の神話学であった。ニーチェは精神と物質・主体と客体等の二元論的思考や進歩史観を否定し、循環する円環を描くような世界観を築きあげていた。著者によれば、ニーチェはそれを天と地・昼と夜・太陽と月・鷲と蛇など神話世界の二元性をつかさどる象徴を用いて語ろうとしたのである。

第五章では、ホーフマンスタールの『第672夜のメルヘン』とヘッセの『デーミアン』を採り上げている。どちらも、ロマン派の神話学者バハオーフェンの『母権制』に触発され、地母神的・冥府的な雰囲気を感じた女性像を描き、合理的・男性原理的西洋世界に対立する非合理的・女性原理的な世界を描いているという。

結論では本研究の成果を総括している。ヨーロッパ世界は近代において合理的思考を発展させたが、それは他者である非ヨーロッパの非合理的思考の発見、ならびにそれとの対決という側面を持つことになった。西洋の知的世界は異質なものととの接触・衝突を繰り返しつつ、ヨーロッパ精神を作りあげたが、この中には他者に対する先入見的な誤解も含まれている。これは異文化との様々な接触から必然的に生まれる問題である。神話学では、非ヨーロッパ的異文化に接する過程で近代的合理思考に頼りながらも、自文化の基盤への省察が行われている。著者はそうした問題意識や省察を文学作品は神話学から受け取り、神話的モチーフの中に表現していると論じている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は近代ヨーロッパの神話学における研究対象や解釈方法の史的変遷を克明に跡付け、変遷のよって来る理由を考察し、非ヨーロッパ諸国の非合理神話がヨーロッパ文学に与えた影響の大きさを論述した、まことに独自で意欲的な研究である。

その独自性は次の諸点にある。

第1としては、学問としての近代神話学がヨーロッパ列強の帝国主義的進出につれて研究対象を広げていったが、それは、神話の概念や研究方法にも影響を与えていることに着目した点である。

第2はフランスを中心とする啓蒙主義時代の神話学からドイツを中心とするロマン派の神話学への系譜の延長線上にニーチェの二元論否定の哲学を置いたことである。このことによって、ヨーロッパ精神が精神と肉体、主体と客体といった二元論的思考から非ヨーロッパの円環的な非合理的思考に移行する道筋が見えてきた。

第3は非ヨーロッパ的思考の中心に母権制を置き、バハオーフェンの思想がドイツの20世紀文学に受け継がれている様をホーフマンスタールとヘッセの作品を例に証明したことである。両者の文学の底流には神話と絡めながら、西洋的な合理的男性原理の世界を離れて非西洋の非合理的女性的思考に逃れたいという渴望があることが明らかになった。

本論文はヨーロッパの神話学が、非ヨーロッパ的合理の世界を発見して、学問の対象や方法が変化すると軌を一にして、文学作品も同種の変容を遂げたことを20世紀ドイツ文学を例に証明したもので、発想のスケールの大きさは他の追従を許さないところがある。しかし、神話学の変遷に伴って変容を遂げたドイツ文学の例証が

ホーフマンスタールとヘッセだけでは物足りない。トーマス・マンへの言及がなかったことが惜まれる。つまり、文学の例証の普遍性に欠ける嫌いがある。

本論文はこうした課題が残されてはいるものの、発想の独自性、視野の広さ、論証の客観性、関連する先行研究への目配りなど、いずれの面でも従来の研究水準を超えた労作である。したがって、学界の中で確たる地歩を占めると同時に、今後において類似するテーマの研究の礎となる成果出もある。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。